

印象記

2000年欧州核医学会印象記
Enjoy Troubles! Enjoy Travel!

町田喜久雄

埼玉医科大学総合医療センター放射線科学教室



図1 学会場のPalais des Congrès Porte Maillotにて

今年の欧州核医学会は、フランスのパリで、9月2日から6日まで、パリの良く学会を開催する Palais des Congrès Porte Maillot で開催された。ときどき俄雨が合った他は、天候にも恵まれた学会であった。

但し事務局の不手際で登録がスムーズに行かず、3時間掛かった人、あくる日になった人、申し込みどうりになっていない人、ホテルが無かった人、登録料を2回引き落とされた人など減茶苦茶であった。

小生は前もって日本から早めに登録をしたけれど、ちっとも受け取りの返事が来なかったので悪い予感にはしてはいたのだが、少々呆れた。

開会式の Askienazy 会長の挨拶も登録のトラブルに対する言い訳とお詫びで始まった。なんでも理由はコンピューターの故障とのことであったが、おそらくフランス製のコンピューターだったのでなかろうか。日本製のコンピューターを使えばこんなことにはならなかったと思うけれど、後の祭りである。

ただし開会式の音楽会は良かった。

会場は大きな部屋から小さな部屋まであり、11会場が使用された。演題数は口演が458題、ポスターが820

題であった。ちなみに応募演題数は1862題だったそうである。

演題テーマ別のセッション数は、心臓・大血管が18、脳神経が12、腫瘍が20であった。その他は、物理、放射性医薬品、腎臓、炎症、甲状腺、消化管、呼吸器、血液、骨関節などであった。

教育講演では、FDG-PET、感染症、小児骨シンチグラム、脳神経、心臓、センチネルノード、などがテーマであった。

特別講演は21世紀の核医学、腫瘍学におけるPETのコストパフォーマンスなどであった。特に後者はわが国でも問題になっているが、不要な手術を避けるコストも考慮するとペイするという見解のようであった。

新しい医薬品としては、LeukoScan(炎症診断)、CEA-Scan(腫瘍診断)、LymphoCide(非ホジキン性リンパ腫の治療)、DaTSCAN(Parkinsonの診断)、Quadramet(悪性腫瘍の骨転移治療用RI)などであった。しかしこれらは一部でしかすぎないので、興味のある方はプログラムを参考にして下されば幸いです。

展示会場では、東芝をはじめとする日本のメーカーは出品していないようであった。少々淋しい感じがしたが、



図2 ポスター展示会場

外国の会社との提携の影響かもしれないと思った。ヨーロッパ核医学のすぐ後に開かれる、トルコのアジアオセアニア核医学会との兼ね合いもあるのかもしれない。

放射性医薬品のメーカーのCISがドイツのシェーリングに買収されたことを、ご存じの方も多いと思うけれど、そのためCISの名前の前にシェーリングの名前が必ず付くようになっていた。学会の配布の布製カバンもそうになっていた。

参加者数は4,500人位のようにであった。

日本の核医学会の大体2倍の感じであるが、日本の核医学会の演題数も1000題を越すように早くなればと思う。

今回はパリということで、夫婦で参加の人も結構いたようである。

この季節パリの市内は観光客で大変混雑していた。家内のお供でシャンゼリゼー通りの有名ハンドバッグ店にもたまたま行ったが、店内は日本人でごった返していた。市内の移動には、地下鉄が便利で利用したけれど、東京に比べると暗くて、汚い感じがした。古いせいかもしれないけれど、観光客も多いのだから、もう少し明るく、安全にしてもらいたいものである。

なお、2001年の欧州核医学会は、8月25日-29日にナポリで(問い合わせ先: email ega@ega.it)、2002年は8月31日-9月4日にアテネ(e-mail congress@eanm-athens2002.gr)で開催されるそうである。

秋の宵 古き寺院に 鴨料理 (雪月花)



図3 学会バンケットにて

小生、千葉がんセンター戸川貴史先生、それとアトラクションの俳優、マリーアントワネットなどが処刑の前に収容されたコンシェルジュエリー地下室にて



図4 学会バンケット スウェーデンの女医さんと小生と家内